

『狐物語』 γ 群テキストの特徴

—第十四枝篇の場合—

原 野 昇

はじめに

フランス中世文学の傑作『狐物語』はいくつかの挿話（エピソード）を集めて集成したものであり、「狐物語集」と呼ばれてもよいような作品である。それらの挿話の一つで、またはいくつか集まって一まとまりとなっており、その一まとまりはそれぞれ「枝篇」と呼ばれる。一枝篇のなかで一つの挿話のみが語られている場合と、いくつかの挿話の一つの枝篇のなかに含まれている場合とがある。また、写本によっても、挿話と枝篇との関係が同一ではない。そもそも「挿話」を定義する外的指標もなければ、内容的にも、非常に小さな内容的なまとまりをもって一つの挿話とするか、細かな挿話をまとめて一つのかかなり大きな挿話とするか、すなわち、どこからどこまでを一つの挿話とするかは、かなり主観的にならざるをえない。それに対して「枝篇」については、写本の中で、八行分のスペースを占める大きな装飾文字で始まっていたり、冒頭に赤いインクによる朱見出し（リュブリック）がついていたたり、エクスプリシットという語で結末が示されていたりするの、それらが写本によって相違があるとはいえ、ある特定の写本に関しては、物理的にかなり明確に定義することが可能である。しかし枝篇の扱いが写本によって異なっているの、どの写本に基づいて枝篇を論じるかで、「枝篇」が異なってくる。そこで現在では、主として A 写本を底本として校訂されたマルタン版の枝篇分類と枝篇の呼称が用いられることが多い。C 写本を底本として校訂された福本・原野・鈴木版では、「枝篇」の代わりに「ユニテ」という術語が用いられている。「ユニテ」というのは、C および M 写本において、一つの装飾大文字から次の装飾大文字までのテキストのことである。（最終ユニテには、当然のことながら、次の装飾大文字はなく、写本の最終行まで、ということになる。）1 ユニテには、一つまたは複数の挿話が含まれており、基本的には、「枝篇」とほぼ同じ概念であるが、「ユニテ」の方が「枝篇」よりも含まれている挿話の数が少ない。別の言い方をすれば、C および M 写本（= γ 群写本。後述）においては、その他の写本（= α 群および β 群写本。後述）の「枝篇」が細分されている。すなわち、「ユニテ」とは、 γ 群写本において、その他の写本における「枝篇」に匹敵するもの、とすることができる。

初期の枝篇群は 1175 年頃に書かれたが、それが好評を博し、その後次々と新しい枝篇が書き足されていき、最後期の枝篇が書かれたのは 13 世紀半ばである。

『狐物語』を現在に伝える写本は、主要なものだけで 14 点ある。それらはいずれも各枝篇の創作時期よりも一世紀以上も後、すなわち 13 世紀後半から 15 世紀にかけて作成されたものである。各写本は、採録している枝篇やその数、また枝篇の収録順序などが同一ではなく、それぞれ異なっている。しかし、大きく三つのグループに分けることができる。それらは α 群、 β 群、 γ 群と呼ばれている。各群によって、採録枝篇やその数、およびその収録順序に特徴があるだけでなく、各枝篇のテキストについても、各写本群によって特徴がある。年代的に言えば、 α 群の写本構造が最も古く、 γ 群のそれが最も後期のものである。

厳密に言えば、採録枝篇数や順序など写本の構造に基づく写本分類と、テキストの内容上の特徴に基づく写本の系統分類とは、区別して扱わないといけない。そして後者については、『狐物語』全体の比較のみでなく、各枝篇ごとにそのテキストの異同をみていく必要がある。そこでここでは第十四枝篇の場合を例に、そのテキストを α 群写本のそれ（マルタン版¹⁾を使用）と γ 群写本のそれ（福本・原野・鈴木版²⁾を使用）とを比較し、 γ 群写本のテキストの内容上の特徴を探ることにするが、当然のことながら、写本全体の構造上の特徴も同時にみていくことになる。

1 構造上の特徴

第十四枝篇はマルタン版では、その数字どおり冒頭から 14 番目に位置する一枝篇であり、合計 1088 行からなる。それに対し福本・原野・鈴木版では、第 6 ユニテ「ルナールがティベールの尻尾をちょん切った話」と第 7 ユニテ「ルナールがイザングランの弟プリモーを坊主にした話」の二つのユニテに分かれており、行数は第 6 ユニテが 326 行、第 7 ユニテが 690 行、合計 1016 行である。

総行数だけを比べれば、そう大きな差がないようにみえるが、ユニテごとに比べれば、第 6 ユニテと第 7 ユニテとでは、マルタン版第十四枝篇に対応するテキストの行数には大きな差がある。第 6 ユニテはマルタン版の 1 行目から 200 行目までであり、第 7 ユニテはマルタン版の 201 行目から最後までである。行数を比較すると、第 6 ユニテでは、マルタン版 200 行に対し、福本・原野・鈴木版 326 行であるので、後者が 1.6 倍強の行数となっている。一方、第 7 ユニテでは、マルタン版 888 行に対し、福本・原野・鈴木版 690 行であるので、後者の方が前者の 8 割弱の行数しかない。

あらすじ

腹をすかせたルナールは、巢穴モーペルチュイを抜け出し、山猫ティベールに出くわす。ティベールは近くの農家に牛乳壺を収めた櫃があるので、それを失敬しに行くところだった。ルナールは誘われて、

二人で一緒に行く。

農家に着くとルナールは、ティベールに櫃の蓋を開けてみろと言われて、蓋を持ち上げる。その間にティベールは櫃の中に素早く入り込み、一人で牛乳を好きなだけ飲み、残りは壺をひっくり返して流してしまう。(ティベールの悪巧み)

ティベールが櫃から飛び出したとたん、蓋を支えきれなくなったルナールが、持ち上げていた蓋を放したので、ティベールの尻尾がちよん切られる。ティベールがさんざん恨みを言うが、ルナールは、尻が軽くなってかえってよかっただろう、と言う。

二人はとある鶏小屋に着く。何とか仕返しをしてやりたいと機会を伺うティベールは、言葉たくみにルナールをそそのかす。若鶏は小さいし、雌鶏を襲えば、雄鶏がけたたましく鳴き、百姓が目をさますので、まずは雄鶏を襲えと。それを真に受けたルナールは、雄鶏シャントクレールにがぶりと噛みつく。

それを見たティベールは、ルナールにいっぱい食わせてやろうと、声をかける。しっかりくわえているかと話しかけられたルナールは、「大丈夫だ」と答えてしまい、そのとたんに逃げ出したシャントクレールがけたたましい鳴き声を上げたので、農夫が起き出し、犬をけしかける。(ティベールの悪巧み)

ルナールは必死で逃げて行くが、ついに犬たちにつかまり、さんざんひどい目に合わされる。かろうじて犬どもの一匹の鼻を食いちぎり、一矢を報いる。

以上のように、この第6ユニテ(=第十四枝篇の前半)は、前半の牛乳壺入り櫃のエピソードと、後半の口にくわえた鶏のエピソードの二つからなる。前半の牛乳壺をめぐるエピソードは、この枝篇(ユニテ)だけに見られるものである。とある農家の様子を伺っていた山猫ティベールがルナールに次のように言っている。

女が今牛乳のいっぱい入った壺を櫃に
しまったところなんだ。

(白水社版、24-25行。以下指示のない『狐物語』の引用は同版による)

その牛乳は、おそらく彼女が今搾ったばかりなのであろう。農家での女性の仕事の様子を
はじめ、パンや牛乳などの食糧を収納した、長持ち大の大箱(櫃)が舞台である。その櫃
の天面は、奥側にちょうつがいのついた蓋であり、手前を持ち上げて開閉するものである。

ティベールが中にすばやく入り込み、牛乳を飲んでいる間、蓋を持ち上げて支えていたルナールが、重くて支えきれなくなるほど大きな蓋で、それがバタンと落ちて閉ったとたんに山猫の尻尾がちぎられてしまうくらいの重さがある。このように、当時の農家での生活の様子がありありと活写されている枝篇である。

後半のエピソードも、大事に飼っている鶏が狐に襲われるという、農家で日常しばしば起きる事件がモチーフとなっている。このモチーフは『狐物語』の中でくりかえしあらわれる。鶏小屋は修道院の敷地内のこともある。その中で、ルナールがくわえていた鶏に、うっかり口を開けて喋ってしまったために逃げられてしまう、というエピソードは第二枝篇にもある。チーズを口にくわえていた鳥のティエスランが、ルナールにおだてられてチーズを落としてしまうというエピソード（第二枝篇の五＝第 18 ユニテ）も類似のモチーフと言えるが、「ルナールと雄鶏シャントクレール」のエピソードは第十四枝篇とそっくりである。制作年代は第二枝篇の方が先なので、第十四枝篇は第二枝篇の焼き直しと言ってもいいくらいである。

2 第二枝篇との比較

しかし細かく比較してみると、相違も多々みうけられる。まず登場人物が異なっている。第二枝篇では、くわえられている雄鶏シャントクレールと逃げて行くルナールとそれを追いかける農夫たちの三者であるが、第十四枝篇では、それにその場面を見ている山猫ティベールが加わっている。そこから、次の重要な差が出てくる。すなわち、ルナールに巧みに話しかけ口を開かせるのが誰かということであるが、第二枝篇ではそれは口にくわえられているシャントクレール自身であり、いわば食われる者シャントクレールと食う者ルナールの直接対決である。雄鶏は狐の口にくわえられていても、口はきける（鳴き叫ぶことができる）のである。

「どうしたんだ、ルナール君」とシャントクレールは切り出しました。

「盛んに喚き立てているあの連中が

君に罵詈雑言を浴びせているのが聞こえないのかね。

コンスタンも君を追っかけて素っ飛んで来るぜ。

さあ、あそこの門を出る時に、悪態の一つでも

彼奴に浴びせてやってはどうかね。

『ルナールのかっぱらい』なんて言ったら、

『お生憎さま』とでも言ってやれ。

それほど奴をぎゃふんとさせる科白はないぜ」(396-404 行)

と話しかけられたルナールはまんまとひっかかり、

「お生憎さま、こいつは俺様が頂戴してゆくぜ。
お気の毒だがこれはもう俺様のものさ」(409-410行)

と答えてしまい、シャントクレールに逃げられてしまう。

それに対し、第十四枝篇では、ルナールが農夫に追いかけられる様子を眺めている山猫ティベールが、ルナールにいっぱいくわせてやろうと話しかけるのである。第十四枝篇では、ルナールとティベールの一連の悪巧み合戦のなかに組み込まれているからである。ルナールが櫃の重たい蓋を持ち上げている間に、ティベールは中で牛乳を思う存分一人で飲んだ上、飲みきれないで壺に残った牛乳をわざわざひっくり返してしまう。(ティベールの悪巧み) ティベールが勢いよく飛び出したので、そのはずみで蓋が落ちてティベールの尻尾がちょんぎられてしまう。故意ではないと言うルナールの弁明にもかかわらず、尻尾を切られたティベールはこれをルナールの悪巧みととらえ、復讐の機会を狙っていた。そこでルナールに話しかける。

「しっかりくわえたかね。
逃げられないように気をつけろよ。
しっかりくわえていないんじゃないか、ねえ君」(237-239行)

それに対してルナールは次のように答えてしまう。

「いや、大丈夫だ。
首っ玉と腿を抑え込んでいるから
逃げられっこないよ」(240-242行)

こうして山猫ティベールはルナールにどじを踏ませ、仕返しを果たすのである。

3 γ群写本の特徴

ここでγ群写本のテキスト(福本・原野・鈴木版)とα群写本のそれ(マルタン版)との僅かではあるが重要と思われる差について指摘しておきたい。ルナールが鶏小屋で鶏に襲いかかる場面であるが、マルタン版では、

Renart s'en vait au coc tot droit

ルナールはまっすぐ雄鶏めがけて突進しました (160 行、引用者訳)

となっているのに対し、福本・原野・鈴木版では、

A Chantecler tot droit s'en vet

(ルナールは) まっすぐシャントクレールめがけて突進しました
(229 行、同)

と、「雄鶏」が「シャントクレール」という固有名詞に変わっている。これはγ群写本の制作者(編集者)が意図的に変更したものに違いない。ルナールが口にくわえていた鶏に、うっかり口を開いて逃げられてしまうという話は、「ルナールと雄鶏シャントクレール」というエピソードとしてすでに読者/聴衆によく知られていたもので、ここ第十四枝篇においても、シャントクレールを登場させたのであろう。

しかしこの配慮は、逆効果とは言わないまでも、不要であった。なぜならば、ここ第十四枝篇においては、すでにみたように、ルナールと山猫ティベールの対決、悪巧み合戦が主要テーマなので、シャントクレールという名前など無い方が二人の対立が際立つとも言えるからである。

4 ルナールと犬

マルタン版第十四枝篇前半と福本・原野・鈴木版第 6 ユニテの行数は、後者 (326 行) が前者 (200 行) の 1.6 倍強の分量であることはすでにみた。前者にはあつて後者に該当するものがない行も 8 行あるが³⁾、大半はその逆に、後者による書き加えである。そしてその書き加えは最終場面、すなわちルナールが農夫のけしかけた犬たちに追いかける場面に集中している。γ版(福本・原野・鈴木版)で書き加えられた 76 行のなかで、「犬」という語(chien, chiens)が 8 回、「番犬」(gaingnons)が 1 回、計 9 回使用されている。例えば、

そして犬どももその後を追いかけて来ます。

ルナールは先程潜り込んだ

垣根の狭い抜け穴の所まで来ると、

そこから出ようとしてました。

ところが、犬どもが突進してきて、

彼の毛皮に噛みつきました。

彼が生きた心持ちもしなかったのも無理からぬことです。

犬どもは彼を杭の根元にいやというほど叩きつけ、
引きずり倒したり、地面に打ちのめしたり、
散々な目に合わせました。
ルナールはこれによくぞ耐えたものです。
もうどうしようもないと観念したのです。
何しろ、犬どもが彼を引きちぎろうとするものですから、
逃げようにも恐くて逃げられたものではありません。

(290-303行)

このように、ルナールが農夫の番犬に追いかけられ、追いつかれ、噛みつかれてひどい目に会わされる様子が詳しく描かれている。

『狐物語』は狐のルナールと、さまざまな動物（鶏をはじめ、鳥や四十雀などの鳥類を含む）や、農夫や司祭や修道士などの人間との悪巧みのしかけ合い、知恵くらべが中心テーマであり、ルナールにだまされたり、ルナールをだましたりするものの代表として、ルナールの宿敵狼のイザングランをあげるのが普通である。しかしこの第6ユニテ最終場面で、ルナールが農夫の番犬に追いかけられる様子が、α群写本に比べてγ群写本において大幅に書き加えられ、描写が詳しくなっていることには、『狐物語』の中における犬の役割に対するγ群写本制作者の何らかの意図が託されているのではなかろうか。γ群写本の冒頭には、α群、β群の写本と異なって、「ルナールの誕生」の挿話が置かれている。そこではルナール誕生の様子が次のように描かれている。

アダムが棒で海面を叩くと、一匹の羊が出て来た。ミルクやチーズがとれるので、アダムとイヴは大喜び。イヴはもう一匹いたらもっとよいと考え、アダムの棒を取って海面を叩くと、出て来たのは羊ではなく狼であった。狼は羊を襲って掴まえ、森に逃げていく。そこでアダムがイヴの棒を取り上げ海を叩くと、今度は一匹の犬が出て来て、逃げていく狼めがけて突進していく。犬に追いかけられた狼はしぶしぶ羊を放す。アダムは羊と犬を手に入れて大喜び。アダムが海を打つたびに出来た動物はみな飼いならされ、人といっしょに暮らしていくが、イヴの手から出て来た動物はすべて森に逃げていき、野生化した。そのなかに狐のルナールもいた。

ここでは、犬に追いかけられるのは狼であるが、重要なのは、狐のルナールはイヴから出たものであり、人に害をなすが、犬はアダムから出たものであり、人に善をなすものだということである。すなわち、ルナールが犬に追いかけられる図は、悪の権化ルナールが

善の化身である犬に追いかけている様を表していることになる。

第6ユニテ最終場面で、ルナールが犬に追いかけられる様子の描写に大幅な加筆がみられることは、γ群写本制作者の『狐物語』に対する一貫した意図の現れと考えるとよいのではなかろうか。すなわち、ルナールを人間の悪の象徴ととらえ、それを女性に結びつけ、その対極として善の象徴である犬を置き、後者に前者を追いかけてさせているのである。

しかし、ことはそれほど単純ではない。さきほどの引用の直後で、ルナールが犬に一矢を報いているのである。

ルナールは息も絶え絶えになっていましたが、
その鋭くて頑丈な牙で
一匹の犬の鼻に噛みつき、
そいつに吠え面をかかせました。
犬はこりゃかなわんと、
跳び退き、盛んに首を振りました。
盗人猛々しいルナールは
犬の鼻を食いちぎったのでした。 (304-311 行)

前述の象徴的解釈を適用すれば、悪が善に仕返しをしたことになる。この場面もマルタン版にはなく、両方ともγ群写本制作者の加筆である。このようにγ群テキストにおける加筆・修正には複雑なものがあるが、第十四枝篇前半(=第6ユニテ)における加筆・修正にも、γ群テキストの特徴がよく表れていると言ってよからう。

注

- 1) Ernest Martin, *Le Roman de Renart*, 3 vols, Strasbourg, 1882-1887.
- 2) Naoyuki Fukumoto, Noboru Harano & Satoru Suzuki (éd.), *Le Roman de Renart* édité d'après les manuscrits C et M, 2 vols, Tokyo, 1983 et 1985.
- 3) マルタン版の 37-44 行の 8 行が、福本・原野・鈴木版では欠落している。しかし、これは写字生の書写作業中の不注意によるものと考えてよからう。すなわち、36 行末の単語 *meson* を書写した後、それを 44 行末のそれと錯覚して、45 行目の書写へと進んだのであろう。この種の対応行の欠落は、意図的な削除(または加筆)とは区別して扱う必要がある。

マルタン版

Tant qu'il vindrent a la meson.

Qui tote estoit close de piex.
'Dex' dit Renars 'bauz sire dex,
Conment porrons entrer dedenz ?
Ces piex sont si entretenanz
Que n'i porrons metre lez piez.'
Dist Tebert 'ne vos esmaiez !
Molt bien, ce croi, vos i metron.'
Lors s'en vont entor la meson
Tout belement le pas soe (Martin, vv.36-45)

福本・原野・鈴木版

Tant qu'il vindrent a la meson,
Tot belement le pas soué (Fukumoto-Harano-Suzuki, vv.36-37)